

三岸好太郎 自筆年賀状

「基本情報」

三岸好太郎自筆年賀状

宛先 洋画家の某氏(註一)の実家(判読困難)

消印 昭和五(一九三〇)年一月七日午後二丁四時(郵便局名は判読不可)

技法不明

九・二五×一三・七〇センチメートル

「解説」

この年賀状は洋画家の三岸好太郎本人によって書かれたものと思われるが、鑑定は受けていない。或る洋画家(故人)の妻で同じく洋画家の某氏から出たものであるという。同氏の実家が若い洋画家を支援していた折、三岸好太郎も一時出入りしていたので、年賀状をもらったが、空襲が激しくなって防空壕にしまっておいたら、湿気で葉書どつしがくっついて保存状態が悪くなってしまったそうである。

通信面は横長に、宛名面は縦長に使われているが、通信面の上部が宛名面の左方に相当する。

通信面の「1930」という文字の左下に見えるものは、この年賀状が出された一九三〇（昭和五）年が午年なので、馬だと思われる。「9」と「3」と「0」という数字の内部に縦書きで通信文が書かれているが、判読が困難なので、本稿では翻刻文は掲載しないことにした。

水色と赤による着彩は水彩かグワッシュを用いているようである。「1930」という数字と馬の部分は塗り残しによって表現されている。「1930」以外の文字はペンで書かれているように見える。しかし、確実な根拠はないので、塗り残し以外の技法については不明としておく。

宛名面には、上部に「郵便はかき」と右から横書きで記され、その下に宛先の住所・氏名、差出人の住所・氏名が右から順に縦書きで記されている。筆記用具はペンだと思われるが、断言はできない。なお、宛先の住所・氏名は存命中の人物の個人情報に関わる可能性があるため、画像に処理を加えて見えないようにし、翻刻文も掲載しないことにした。

上部の「郵便はかき」と差出人名の「三岸好太郎」は判読できるが、後者の「三」は薄くなっている。差出人の住所で読める部分を抄出してみると、「中野区鷺ヌの宮四〇七」と書かれているように見える。厳密には「中」の上の一字までは残っているのだが、この字は読み取りづらい。そこから上の字は消えてしまっている。一九二九（昭和四）年五月、三岸は東京中野区鷺宮五丁目四〇七番地にアトリエ註二つきの住宅を建てているので、「五丁目」を省略してしまったようだが、その住所を書いたものと思われる。

切手ははがれてしまったようで残っていないが、消印は昭和五（一九三〇）年一月七日午後二〜四時という日時が判読できる。ただし、「一月」の「一」（原文では算用数字）

は薄くなっている。郵便局名は読めない。消印の上にはもう一つ印が押されているが、文字は消えてしまっている。

保存状態は良くないものの、この年賀状は三岸好太郎の肉筆画が描かれている点で貴重であり、また、彼の交流関係を示す資料としても有用であるといえよう。

〔註〕

一、現在もご健在であるかもしれないので、ここでは実名は伏せることにする。

二、佐藤由美加編「年譜」（北海道立三岸好太郎美術館・北海道立近代美術館・下関市立美術館・府中市美術館・名古屋市美術館・東京新聞編『生誕100年記念 三岸好太郎展』、東京新聞、発行年月日は無表記だが著作権表記は二〇〇三年、一八六頁）。

執筆者・発行者 植田智晴

二〇一〇年七月三日 初稿発行

二〇一四年四月七日 第二稿発行

© UEDA Tomoharu 2010-2014

この PDF の無断での転載、複製などは禁止とさせていただきます。